
銀木犀

福山てん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀木犀

【Zコード】

N3127D

【作者名】

福山てん

【あらすじ】

幼い頃百合と満治は両親から捨てられた。それから20年がたつたある日二人は両親の死の知らせを受けた。二人は両親の葬儀に向かつた、そこで倉本真奈美に出会う。真奈美と二人の関係は？満治は両親の影をぬぐうことが出来るのか？人は過去を見つめない限り自分も未来も見えてきません。満治はどう立ち向かっていくのでしょうか？

第一章～第一章

あの日のことは鮮明に・・・鮮やかに浮かび上がらせることができる。

泣きながら話す父とただ謝るだけの母。

僕は妹の手を握り、そんな一人を見つめていた。

まだ小学2年だった僕と、まだ幼稚園にも上がっていない妹。

妹は始めて見る父と母の姿に今にも泣き出しそうだった。

それに気がついて僕は妹をそばに寄らせる父と母を見させないようにした。

妹はそれを感じたのか僕の後に自ら隠れた。

父と母は相変わらず僕にしゃべっていた。

僕には父が語る言葉も母が謝罪する言葉も理解できなかつた。

一気にしゃべり急に父は僕に一礼し、背中を向けた。

母はびしょびしょのハンカチを握り締め流れ続ける涙を拭いていた。

母が最後まで言い続けた言葉は「ごめんね、ごめんね」だった。

母は僕の前にぐしゃぐしゃの顔を持ってきた。

母からは甘いにおいがした。

僕の頭に手を置き、最後に頬をなでた。

母が謝るたびに唾のよくなものが散ってきた。

そして勢いよく立ち上がり、父が待つまでは走つていった。

僕は母が散らした水を舌で触った。

それはショットぱく涙だと気がついた。

父さんと母さんほどこへ行つたのだろう。

そして「まはい」と「こどり」なのだろう。

父と母を乗せた車はどういなくなっていた。

僕の後に隠れていた妹が泣き出した。

そして僕は捨てられたのだと気がついた。

第一章

「ねえ、私たちがどうすればいいのかな？」

妹の百合がさほど明るくない声で言った。

「何が？」

僕はちゅうととぼけて言つてみた。

「もう、今日のお葬式の話よ。」

「別に・・・どうしていいんじやない？」

俺たちは母さんのかわりで来たんだし。」

「うーん・・・そつなんだけどね・・・あーん、わかんない！
自分が何いいたいかわかんない！やめ！」

僕は何も言わずに家のへと急いだ。

今日は昔僕らを捨てた両親の葬式だ。

あの日から20年が経ち僕は27歳に、百合は23歳になった。

百合は当時3歳で何一つ覚えていない。

だから、百合には高校に上がったとき

僕たちの本当の両親のことを話した。

百合は今まで育ててくれた人が自分の両親ではないと知つて

一時期はひどく落ち込んでいた。

しかし、それを受けとめ今は立派に成人している。

僕たちを育てくれた母の姉、由紀子には子どもがなく、

僕たちを自分の子どものように扱つてくれた。

夫の橋義雄も氣のいい人で、とても可愛がつてもうつた。

だから僕らは、由紀子と義雄を「母さん」「父さん」と呼んでいる。

どういう経緯で僕たちがこの家にお世話になることになったのかは
知らない。

橋夫妻は母と父に関連することは何も話さなかつた。

そして僕もこの20年間、一切何も聞かずに過ぎしてきた。

子どもながらに聞いてはいけないのだと、

橋夫妻から発せられていたふいんきで感じとつた。

幼く何も知らない百合は父と母はどう行つたのかと泣いていた時
期もあった。

そんな時は僕が百合をあやしていた。

橘夫妻に迷惑をかけたくなかつたから。

「あら？お兄ちゃん、あれじゃない？喪服來た人いるわ。」

確かに数メートル行つたところに喪服を着た人が出入りしている家が見えた。

僕の心臓は飛び跳ねた。

隣にいる百合のほうが落ち着いているように見える。

あの両親にこれから会つのだ。

僕たちを捨てた両親に。

どういう顔をすればいいのかまったくわからない。

もちろん彼らはもうこの世にはいないのだが・・・。

「お兄ちゃん？・・・大丈夫？顔色悪いわよ。」

「ああ・・・大丈夫だ・・・。」

僕は船に乗つて九州まで行つたときの事を思い出した。

あの時僕は、船に揺られて酔つた。

吐いても吐いても気持ちが悪い、今の気分はある時と少し似ている。

家に近づいていくたびに頭をハンマーで殴られているような気分になつた。

もういつそのこと引き返してしまったかった。

それでも別に構わないのだ、それに橘夫妻も僕たちが葬式に行くのは反対だった。

知らせを受けた橘夫妻は、それを僕たちに言つべきか迷つっていたらしい。

義雄は僕たちも大人になつて落ち着いているのだから、

今蒸し返すのはよくないという意見だった。

しかし由紀子は僕たちにひやんと話して、

みんなで話し合つべきだという意見だった。

でも由紀子もまさか僕らが行くという意見になると

思つていなかつたらしい。

僕が最初に行くという意見を出したわけではない、

百合が言い出したのだ。

この意見に僕は橘夫妻の前ではいい顔をしなかつた。

なんだか橘夫妻に失礼だといつ気持ちがあつたのだ。

しかし、百合は絶対に行くといつて譲らなかつた。

百合は両親の顔も声も覚えていない。

なのになぜ行くといったのか、僕は話しあいの後百合に聞いてみた。

けれど百合は答えなかつた。

そしていつづけた。

『お兄ちゃんをさつと認めないし、怒るから言わない。』

その後何度も聞いてみたけれど、結局答えることは無かつた。

気にならないと言つたら嘘になるが、もつあえて聞かないことにした。

百合は時がくるまで教えてくれないと知つていてるから。

「お兄ちゃん・・・引き返す?私は別にいいよ。」
「あんね無理言つて、やつぱ帰らう~。」

「・・・」

はつさり言つて限界だつた。

しゃべるのも腹がむかむかしてとてもじゃないがしゃべれない。

口を開いたらきっともどしてしまわ。

百合が心配そうに顔を覗き込む。

その顔が一瞬あの時の母さんにそいつに見えて

僕はその場に座りこんでしまった。

くせつ情けない・・・百合に心配かけるなんて最悪だ。

しかも母さんとダブルなんて・・・。

「お兄ちゃん大丈夫? どうかトイレでもあればいいんだけど・・・。

」

百合は辺りを見まわしながら僕の背中をさすっていた。

僕は相変わらず気持ち悪くてうずくまっていた。

すると、

「・・・あの、大丈夫ですか?」

その声に百合は答えた。

「ああ、うーんちょっと大丈夫じゃないんだ。ここいら辺にトイレとかない?」

公園のとかでもいいんだけど。」

「公衆トイレですか？多分この近くにはないです。
あの大人呼んできましょうか？」

「お兄ちゃんもそうしてもらひ?..」

僕は首を横に振った。

そして力を振り絞つて顔を上げ立ち上がった。

百合に支えてもらひつてだが・・・。

「大丈夫・・・少し気分悪いだけだから・・・」めん帰ひつ、百合。

「

「うん、『めんねお嬢さん、ありがとう。』

僕らが背を向けて帰ひつとした時だつた。

「あの・・・もしかして横井さんのお葬式に来られたんですか？」

その言葉に僕らは反応して振り向いた。

そこにいたのはまだ幼さの残る中学生ぐらゐの女の子だった。

制服を着てまつすぐ立つていた。

「うん・・・けど・・・ちょっとこの人調子悪いし、今日は帰るわ。

「

百合がまた言つた。

しかしその女の子は百合が言つたことなど聞いていなこみつだつた。

僕らを見つめ何か確かめているよつだつた。

そして僕を見てこう言つた。

「間違つていたら」めんなさい・・・もしかして横井さんの子どもさんですか？」

いい年の僕らを見て『子どもさん』といわれたのにはびっくりした。

といつか一番先に驚かなくてはならないところに驚けなかつた。

その子の言つた言葉があまりにも突然で、リアルで、何も考えられなかつたのだ。

百合も同じのよつだつた、目を開き女の子を凝視している。

声も出ないよつだつた。

「違つよ・・・何で？」

僕は吐き氣を抑えて言つた。

「あついえー」めんなさい、言つてみただけです。
「めんなさい変な」と言つてしましました。」

女の子は悲しそうな困ったような顔をして下を向いた。

百合が見ると同じような顔をしていました。

僕はそれを見てなんだかいたたまれない気持ちになった。

「百合・・・行こう。」

百合は何も答えず、僕を支えて歩き出した。

帰ろうとする僕らの背中に女の子の視線が刺さっていた

僕は振り向いて何も言いつことをしなかった。

振り向く力も無かつたし、次に女の子と目が合えば

きっと僕らの正体がばれると悟ったからだ。

女の子は多分後ろで僕らが見えなくなるまで、

そこには立つてこるだらう。

なぜかそんな気がした。

「・・・あの子が、父さん達を知ってるのかな?」

百合が息を吐き出すよに薄れた声で言つた。

「あ・・・でも葬式に行つていたんだろうな。」

「うん、 今日日曜なのに制服だったものね。 中学生へりこみね、 多分。」

目を閉じたら何もかも見透かすような女の子の目が僕を捕らえていた。

どうこう関係なのがは知らないがもう会いたくなかった。

あつと今日が過ぎれば忘れてしまつ、

今はそう想いたい。

結局僕らは死んでしまつた父さんと母さんに線香をあげることまできなかつた。

でも僕はこれで良いと思つ。

今更、

そう本当に今更

僕もあの人たちの子どもには戻れない。

時は経ちすぎてしまつてゐるから。

「あつお兄ちゃん一見で金木犀よ。

わつわからいこないがすると思つたの。」

百合はうれしそうに言つた。

僕は少し顔を上げた。

おれんじ色をした、小さな花は

甘い香りをこちら中にまきちらしていた。

百合は知らないだろう、

僕らの母さんは金木犀が好きだったことを。

そして幼い頃住んでいた家の近くに金木犀があつたことを。

そう百合は知らない、

何も。

けれど・・・

あの子は知っているのだろうか。

の人たちから聞いているんじゃないかな?

そして僕らのことも・・・。

「ねえ、もう大丈夫? どつかで休む?」

「あつ? ああ、もう大丈夫だな。

ありがとう。」

やつこいつゅうへり僕は田舎から離れた。

来るときはわからなかつたけど

いじじはなび下でマリヤとかに出てなほどもつたりとした住む街だった。

車はまどろみ通りなし、騒音も無い。

そして母さんの好きだった金木犀があるのだ。

あの人たちがいこを選んだ意味が

分かるよつな気がする。

「お線香あげられなかつたね。」

ぽつりと田舎が言つた。

「あげたかつた？」

「んー・・・そつだなあ・・・私もあ顔見たかつたんだよね。

ほらー私見たこと無いじやない？

「写真とかも。だから見たかつた。」

「もしかしてそれ理由だったの？」

葬式来たい理由つて・・・」

「違うよ。

ん？ あつてんのかな・・・いやけど、
それはサブの理由だから」

「じゃあ、一番の理由は？ いい加減教えてよ。」

「ダメ。秘密」

「なんだそれ」

「いいから、いいから。気にしないのー。」

あつお母さんたちに電話しなくちゃね。

明日すぐ帰る？」

「うん、やつくつする意味も無いし」

「わかった。」

「じゃあ、先に帰つててよ。」

私会社の人たちにお土産買つかひ。

お兄ちゃんさつこいしないでしょ？」

「ああ、帰つて寝る」

「はあー。一人で帰れる?

途中まで一緒にホテルまで帰らうつか?」

「いや、いいよ。もう大丈夫だから。

田舎もあんまり遅くならないうつに帰つて来いよ」

「過保護ねえ。

お兄ちゃんもじっかり休んでね」

やつらつて田舎は一台タクシーを止めてどこかに行つてしまつた。

僕はホテルまで歩いて帰ることにした。

さほど近くはないが、歩いて帰れないほどではない。

気分的にもそんな気分だった。

金木犀のにおいがまだ鼻に残つていた。

僕はどこまでも甘いにおいにとらつかれた気がして嫌だった。

帰つてすぐシャワーを浴びよひ、と思つた。

僕は朝来た道をゆっくり歩いた。

「」を囁さんと父さんも歩いたのかと思つと胸をぎゅっと捕まれた

『気がする。

この気持ちをどう言葉にすればいいか分からない。

悲しいとか、寂しいとか暗い気持ちの中にある、

この気持ちに僕は形容詞を付けることはできない。

いや、したくない、気がつきたくない。

僕は頭を空っぽにして、ぽんやり歩いた。

ゆうべり、ゆうべりと・・・。

「あの・・・」

僕は自分の世界から戻つてくるまでに時間がかかった。

我に返り声のほほに顔を向けた。

「あんた・・・」

声の主はさつきの女の子だった。

制服から私服に着替えていた。

上にダウンを羽織つていて、

下にジーパンをはいていた。

わざと見えたとあと回りじよつにまっすぐ立つてこちらを見据えていた。

僕は先ほど感じた吐き氣がよみがえった。

「じめんなさい・・・あつ、ついてきたわけじゃないんです。
向こうから見えて・・・その、

フランフランそれでたんて大丈夫かなと思つて・・・」

僕はその女の子を見て何か思い出しそうになつた。

何かはわからないけど、

それは僕にとつて危険だとサイレンが頭の中になつた。

「大丈夫なんで・・・あんまり気にしないでください」

僕は彼女を見ないで言つた。

サイレンは鳴り響いて僕の頭はわれそつだつた。

早くここから去りたい。

彼女とは話したくない。

「あつ待つてください！

少しお聞きしたいことがあるんです！」

女の子はそう言つて僕の腕をつかんだ。

「ちよつと・・・何あんた・・・」

僕はつかまれた腕から女の子の手が震えているのに気がついた。

「この子は今緊張している。

「「めんなさい！

少しでいいんです、

私の話聞いて欲しいんです！」

女の子の声は震えていて、今にも泣き出しそうだった。

けど僕は女の子よりも自分のことで精一杯だった。

今にも吐き出しそうだったのだ。

「あの・・・大丈夫ですか？」

女の子は僕の顔を覗き込んで言った。

「す、ぐ、顔色が悪い・・・熱あるんじやないんですか？」

女の子は何のためらいも無く僕の額に手を当てて言った。

「熱があります！
す、ぐ、熱いです。

あのわいわいのお姉ちゃんは、どうしてるんですか？」

僕はもう死の時、吐き気を抑えるのに必死でしゃべることが出来なかった。

だから僕は女の子の問いかけに何も答えられなかつた。

「ああ・・・どうしよう・・・あの歩けますか?

私支えますよ。

ビックリして、「お泊まつてこむといひがあるんですか

僕は女の子がビックリしているのかと聞いてきて
なぜよそから来たのを知つてているのか聞きたかった、
けれどそれも僕には出来なかつた。

女の子が何か言つてこむ。

どんどんその声が遠くになつていつた。

視界もぼやけて、

体がいっきに軽くなつた。

女の子の顔が上のほうにあつて、

倒れたのだとわかつた。

もはや体も頭もすべて僕のものではなくなつた。

意識がなくなつていいく時、僕は金木犀の前に一人で立つてゐる父さんと母さんを見つけた。

二人は僕の名をよんでもいた。

第二章

甘つたるいにおいがする。

僕はそのにおいに酔つてくらうしてゐた。

視界はぼんやりとしていて、

いくら皿をこすつても視界は開けなかつた。

この世界の僕はまだ幼くて

父さんと母さんが迎えに来るのを待つてゐた。

けれどあちこち見渡しても一人の姿は見えなかつた。

僕は小さな声で一人を呼んだ。

すると向こうのほうに一人が見えた。

僕はうれしくなつて、一人を追いかけた。

けれどいくら走つても一人には追いつけなかつた。

僕の鼻が地面にくつくへらい前のめりになつて走つても

二人の後姿との距離は縮まらなかつた。

僕は一人を呼ぼうとした。

けれど声が喉から出でくるのを嫌がつてゐるのかのように、

息しか出でこなかつた。

ハスツハスツと空氣漏れのような音しか出ない。

手を叩いて呼ぼうとしても手がうまく叩けなかつた。

僕は泣いて、それでも一人を追いかけようとした。

その時一人歩みを止めた。

二人が振り向いた瞬間、あの甘つたるいにおいがして、

僕は立てなくなつた。

そして二人はまた僕に背を向けて歩き始めた。

もつ迫いつけないと分かつたとき、

僕は目を覚ました。

「あつーお兄ちゃん目覚ました！大丈夫？」

百合が心配そうな顔をのぞかせた。

見たことの無い白い天井が見えた。

そして僕の腕には針が刺さっていた。

点滴をしているのだ。

僕はどうやら病院に運ばれたようだつた。

「ああ、うん。

わつきよつだいぶましだ」

百合はいすに腰を下ろして大げさにため息をついた。

そして言った。

「もうねえ！

お兄ちゃんもダメなときはダメつていつてよー！

「んなことになるなら私ちゃんとホテルまで連れてくよ。
こんな急に倒れられたら私心臓もたないしー。」

僕は百合がポロポロ涙を落しながら怒っている姿を見て

少しだけうれしかった。

「うん。『ごめん、迷惑かけたな。
今後気をつけますんで』

そう言って僕は百合に頭を下げた。

百合は涙を服の袖で拭いてから一つうなずいて、

もう一度今度は安堵に似たため息をついた。

「・・・お礼・・・行こうね」

「お礼? 何の?」

「やだあ、もしかして向にも憶えてないの?」

あの女の子よ。

今日会った中学生くらいの女の子ー。」

そうだ、

あの子に引き止められた時にだんだん気分が悪くなつて、

意識がなくなつたのだった。

「あの子す」「こよ。

意識がなくなつてくお兄ちゃんを何とか支えて、

ベンチまで運んで、

病院に電話かけて、

それからお兄ちゃんのケータイ使って私を調べて電話くれたの。

あつ電話帳の一番上にあつた秋田さんに電話したって言つてたよ。

秋田さんに後で連絡しておいてね。

あとあの子がお兄ちゃんのケータイ勝手に使って
ごめんなさいって言つてた。」

「わかつた・・・

「あの子はどうしてるんだ?」

「帰つたよ。

お兄ちゃん今何時か知つてる?

もう八時過ぎてるんだからね。

私はお医者さんに言つて

お兄ちゃんが田を覚ましたときに不安がるといけないからって

泊めてもらえるようにお願ひしたの。

ホテルから荷物とつてきたし。

それと、あの子には連絡場所を聞いといたから。

僕は女の子が必死に僕の腕をつかんだ時の

顔を思い出した。

そしてつかまれた腕が温かくなるのを感じた。

僕は捕まれたところを擦りながら百合に聞いた。

「何か・・・あの子言つてたか？」

「何か・・・お大事に、とは言つてたよ」

「そう・・・じゃあいい」

「・・・何かね、
あの子おにいちゃんが倒れたのは
自分のせいじゃないかつてすごい責任感じたの。
なんかされた？」

僕は首を横に振った。

「だよねえ、

お兄ちゃんが調子悪いのはもともとだもんね」

「医者はなんていってた？」

「あつ！

そうだった！

お兄ちゃんが田を覚ましたらナースコール入れてって言われてた
んだった！

ヤバイ！

お兄ちゃんたつた今日を覚ましたことにしてよね

百合はそう言つてナースコールを押した。

そしてすぐに大柄な医者が看護婦を連れてやってきた。

百合は医者のために椅子を空けた。

「横井さん、調子はどうかな？」

そう言つて医者は大きな体を椅子に預けた。

先ほどまで百合が座つていた椅子が小さく見えた。

僕は看護婦に終わった点滴をはずしてもうつた。

「もう全然いいです。すみません」迷惑をおかけしました

「いやいや。

病院は迷惑をかけるといひだよ。

それに患者にだけじゃなく看護婦にまで迷惑をかけられるんだからね、

患者の君がそんなこと思わなくていい

大柄の医者は後ろの看護婦を見ていたずらつまく笑つた。

そんな医者の後ろで看護婦も笑つていた。

おそれらへこの医者は好かれているんだろう、

今この空間はあたたかい。

「でも、君は体に迷惑をかけすぎだ。仕事は？」

医者は僕にボタンをはずすよつて指示し胸に聴診器を当つた。

「あつ家のデザインとかしてます。」

「まう、 そなのか。 ぜひ我が病院も新しくして欲しいね」
そう言って僕に笑いかけた。

百合も微笑んでいた。

「仕事は忙しいのか？」

「ええ・・・それなりに、 今は結構仕事がたまっています」

「そなか・・・それはいいことだが、

ちよつと君は働きすぎだよ、

疲れがたまりすぎてる。

体にも心にもね

「はあ・・・気をつけます」

「何か近頃精神的にダメージを受けたりしたかい？」

これには百合が僕より早く反応した。

「百合、 いいから

僕は百合の言葉をとめた。

そして言った。

「先生僕はもう半年ぐらい働きづめです。
多分それが体にきてるんだと思います。
今後気をつけたいと思います」

僕はうすく笑つてみせた。

医者は僕に笑い返し椅子から立ち上がった。

「あんまり働きすぎると死ぬぞ。
少し休みをもらいまさい。
これは約束だ。」

「わかりました。

帰つたら上司に相談しますよ。」

「今日はここで何も考えず眠るんだ。
わかつたね。」

「はい。」

「ではお大事に・・・」

そういう残して医者は看護婦を連れて出て行つた。

「お兄ちゃん・・・その、『めんね。」

「何がだ。」

「私が無理に言つたから・・・」

「今日とかセ・・・
「じめん・・・」

「田舎は氣にすむ」などとなんて何もなこよ。
言つたら、

僕のオーバーワークだよ。

今日のことは関係ないよ

やつぱつ でも田舎は泣きやうな顔をしていた。

「田舎、今日は元気まるんだ?」

「え・・・今日は・・・

仮眠室みたいなのがひらけたりとか
寝かせてもらひ

百合は田舎を伏せて言つた。

これは百合が泣くのを我慢するときの癖だ。

「うう、ううだね。
じやあ・・・・

「田舎僕もう休むよ。

田舎ももう休ませてもういいな。

今日は疲れたる?」

お兄ちゃんもやつべつんで

そう言つて百合は自分の荷物を持つて部屋を出た。

僕は百合の後姿を見つめた。

僕は百合に謝つて欲しくない、

もちろん泣いて欲しくも無い。

百合は過去を知りたがっていた。

両親が死ぬ知らせを受ける前からだ。

直接僕に聞いてくることはしなかつたが、

僕と話しているときに遠まわしに

「聞いひとしてくる」とはあつた。

橘夫妻にはおそらく聞いていないだろう。

僕はそんな時百合の話を打ち切り話題を変えた。

百合には何も知られたくなかつた。

本当の両親が他にいると知つて、

気にならないわけがないのだが知つて欲しくなかつた。

こんな思いをするのは僕一人で十分だ。

百合までこなな途方もない思いしてほしくない。

「百合・・・」めん

僕は布団の中でつぶやいた。

僕は何も考えず頭を真つ白にした。

そして暗闇に落ちていった。

「お兄ちゃん!」

僕は百合の声で目を覚ました。

「やつと起きた!
もう十一時だよ!
病人はいいけど寝坊しすぎだ!」

百合の声ががんがん響いた。

体を起こし、

時計を見た

もう十一時・・・

確かに寝すぎだ。

「百合頭に響く・・・ちょっと静かめにたのむ・・・

「だめ！

お医者さんはいいって言つたけど、
お密さん来てんだもん！」

「は？・密？」

「そうよ。入つてもらつていい？」

「まだ起きたばっかりなんだけど・・・」

僕はむすつとして答えた。

しかし百合は、

「どうぞーー入つていいよーー」

百合は無視した。

さすがの僕も妹の行動に腹を立てた。

僕は仮にも病人だ、しかも寝起きだ。

「あれ？入つてこないなあ・・・

百合はドアのほうに走つて行つた。

「あれえ？」

「何だ？・どうした？」

百合はドアを開け外の廊下を見渡していた。

「昨日の子が来てくれていたの。
お兄ちゃん起きるまで外で待つてって言つたんだけどないのよねえ・・・」

昨日の子と百合が言つて

僕は少し動搖した。

お礼に行くと百合が言つていたっけ・・・

「あ、お兄ちゃん言つとくけど、
本当は私たちがお礼に行かなくちゃいけないんだからね。
なのにわざわざ向こうから来てくださいたんだから!
お兄ちゃんがしんどいだろうからって
なんていいお嬢さんなの・・・ね、お兄ちゃん」

百合は無理に気分を上げてみるみつだ。

いつもならすぐこきがつぐが、

まだ体が本調子ではないみたいだ。

気がつぐのに遅れた。

あつと昨日のことまだ気にしているのだ。

「百合にいたのかなー?」

帰つてくれていたとしたら、

僕にどうてはありがたい。

今は自分のことも考へなくてはいけない。

「よしー。

ちょっと探してくるねー。

その間にお兄ちゃんは用覚ましたってー。」

百合は行つてしまつた。

僕はまたベッドに体を預けた。

昔から百合は前の口氣まづいことがあると

次の日大きな声を出し無理して

気分を上げようとする。

そして何か用事を思い出したフリをして

僕から離れようとする。

僕はため息をついた。

その時

ドアのノックが聞こえた。

僕の心臓はいっきに高鳴った。

あの子がいると思ったのだ、

あのドアに向ひつい。

きつとまつすぐ立つて

見えない僕を見つめているのだ。

もつ一度ノックが聞こえた。

その音は今にも消え入りそうに

弱かつた。

僕は覚悟を決めた。

「どうぞ・・・」

ドアはゆっくり開いた。

そして昨日の女の子が見えた。

制服を着て右手に花束を抱えていた。

花束といつても束といえるようなものではなかつたが。

「ひんにちは」

女の子は作り笑いを浮かべて言った。

「……こんなにむかは

僕は体を起こし、作り笑いで答えた。

「お体大丈夫ですか？

あつ・・・私がいえたことではないんですけど・・・」

女の子はうつむいてしまった。

そういうえば百合が昨日、

僕が倒れたのを彼女が責任を感じている

と言つていたつけ・・・。

「昨日はすみません。

あの私・・・色いろと迷惑をかけました

女の子は本当に自分のせいだと思つていいようだ。

「別に君のせいではないよ
もともと調子もよくなかったしね。

僕は逆に感謝しているよ。

昨日僕が倒れたとき、
処置してくれたんだよね。
ありがとう」

僕はやせじく言った。

よかつたちゃんと言えた。

内心、心臓が飛び跳ねて感情がコントロールできない。

女の子は僕を見た。

あの田だ

確かめて、探るよつな

あの田だ。

頭が痛くなりそうだった。

その時ドアがまた開いた。

「あつ！いた！

いつたいどこにいたの？」

百合だった。

女の子はあわてて言った。

「あつごめんなさい。

私手ぶらだったので

これ・・・

いい物ではないのですが・・・」

そう言って、あの花束もどきを

百合に渡した。

「わあ！

ありがとう！

飾りたいんだけど・・・

私たち今日帰るの。

もつて帰つて家に飾らせてもらひうな

「あつ」めんなさい！

荷物になりますよね。

私考えてなくて・・・

「いやいや！

荷物なんて思つていないよ！

私は花大好きなの、

ありがとう」

僕も女子にお礼を言つた。

女子は少し微笑んだ。

そして百合は花を隅の机に置いて

言つた。

「お兄ちゃん、
診察受けに行かないといけないんだって。
私ここで片づけしとくから、

行つて来て

「何それ、もういいよ
ぜんぜん大丈夫だし」

「看護婦さんにさつき言われたの。

それで下に行つたら、どこに行けばいいか
教えてくれるから。

はい！

行つて、行つて！

僕はしづしづ起き上がつた

そしてここで初めて着替えさせられているのに気がついた。

病院で着る、浴衣みたいなものだつた。

「百合・・・これ着替えたほうがいい？」

「いいと思う。

そんな格好の人いっぱいいたし」

僕はスリッパをはいてドアのほうへ

歩いた。

「お兄ちゃん！

「お子こお礼言つた？」

百合は女子を見ながら言った。

「あつ言つていただきました！」

女子は百合に向かって言った。

「あつこう」と。

百合がいなこと、ちゃんとと囁いた

そう言って僕はドアを開け

病室を出た。

女子はさあと僕と話がしたいんだろう。

ずっと僕を見ていた。

気がつかないフリをしていたから

女子も話すきつかけがつかめなかつたようだ。

病院の廊下は静かなイメージがあるが、

色いろな部屋から笑い声や話し声が聞こえる。

窓の外を見ると木々が葉を落としていた。

中は看護婦さんや母さんや患者が行つたりきたりしている。

僕の父さんや母さんはここに運び込まれたのかな・・・

そつまんやり思った。

「あつー橋さん？」

後ろから呼ばれて、振り返った。

そこには昨日の看護婦だった。

「おはようございます、おつべつじめりまし？」

その看護婦はいがいと背が高く

目線が同じだった。

「ああ・・・はい

おかげさまで・・・。

あの、診察室ってどこにあるんですか？」

「今、呼びに行つてたんですよ

入れ違いにならなくてよかつたです」

僕は看護婦の後についていった。

僕たちは『診察室1』とフレームに書いてあるとおりで立ち止まつた。

看護婦がドアをノックすると中から声が聞こえた。

ドアを開けてもらい僕は中に入った。

中には小さな椅子にきゅつくつと座っている、

昨日の大柄な医者がいた。

紙に何かを書き終えて、医者は人のよさそな
目を僕に向けた。

「昨日より大分顔色がいいね。
どうだ？ 調子は？」

「いいです。吐き気もないです」

「ゆっくり休んだみたいだね、
妹さんが心配していたよ」

医者は笑った。

「すみません。

大寝坊です、起きたら十一時でした」

「よく寝たようだね。

まあ人間寝ることが一番好きだよね。

もちろん私も」

昨日のいたずらっぽい笑みを見せた。

医者は僕の胸に聴診器を当てた。

暖かい部屋の中で、その聴診器だけは

冷たかつた。

「熱は？」

医者は聴診器をはずして机に向かいながら聞いた。

無いと思います」

「どうかいたいところはあるか？」

いえ、そこも

小さな椅子がぎしぎしいつている。

「昨日の約束憶てるかな？」

医者はまた僕のほうを向いた。

「……………」

「ああ、昨日も言つたとおり
体に負担をかけすぎだ。
心臓が弱つてゐる。」

「心臓が・・・？」

「昨日も言つたが・・・

心に負担がかかっていることが
何があるんじゃないか？

僕は首を振った。

「昨日も言つたとおりです。
働きすぎですよ
それで精神的にきたんです」

医者は僕の目を見つめて言つた。

「体は正直なんですよ。
君の感じたことが正直に出る。

私では力になれませんかな？」

話せない。

僕が思つて、感じて、悩んでいることなんて。

彼は僕にとつてなんでもない存在だ。

「本当に無いんですよ。
安心してください、ちゃんと休みます。
体は大切にします」

陳腐な言葉だ。

「こんな」とで彼がだまされる「ことはありえないが、

もつ僕には干渉してこれないだろう。

医者は笑つて「わかりました」とだけ言つた。

僕は椅子から立ち上がり、

診察室を出よつとした。

「お大事に」

医者は言つた。

ドアを看護婦が開けてくれ、

僕は浅く礼だけして

部屋を出た。

さつきよりも廊下が暗いよつた気がした。

医者は僕を知りうとした。

体じゃなく心の中を。

僕はそれを拒否をした

彼にはきっとわからないから。

さつやと片付けをして、ここから出て行きたい。

どにもかじこも息苦しい。

両親がいた場所なんて

僕にとつて苦しいだけだ。

頭がくらべりする。

僕は壁によりかかつた。

息が上がる、

田の中に涙がたまっている。

僕は上を向き、涙が流れないようになした。

本当に僕の体はどうしたんだろう・・・

「橋さん！？」

その声はあの女の子の声だった。

だから僕は急いで浴衣の袖で涙をふき取った。

「どうしたんですか？体やっぱり悪いんですか？」

女の子はパタパタと僕のほうに近寄ってきた。

「いや、もう大丈夫だから。

君は何でここに？」

「百合さんと言われたんです。

迷つてたらいけないからつて

何をどうすれば迷つとこうのか。

百合は何を考えているんだ?

「ああ、ありがとう」

僕はわけの分からぬお礼を言った。

廊下を一人で歩いた。

彼女は歩くときもまつすぐだった。

前を見据えて、

なんだか僕には見えないものを見ている気がした。

そして僕ら一人の足音はなんだか世界に一人しかいないような

錯覚をさせた。

この子はいつたい何者なんだろうか?

すると突然、一つ先の僕が泊まつた部屋から百合が顔を出した。

「お兄ちゃん!

やつと帰ってきた

「ありがとうね真奈美ちゃん」

真奈美と呼ばれた女の子はまた下を向いた。

「どうだつた？ 何て？」

「心臓弱つてるから休めだつて」

これに隣にいた真奈美は驚いた顔をした。

「ただの過労だ。

帰つたらしつかり休むよ」

「嘘ばつかりだ」

百合はため息をついて言つた。

「他には？ 何か言われた？」

「いや何も」

僕はそう言つて帰る支度を始めた。

浴衣から自分の服に着替えるときは、

一人に外へ行つてもらつた。

片付けといつても一日泊まつただけだから

何もすることがなかつた。

それに百合が僕のいない間ほとんど手続きをしてくれていたから

僕は荷物を持つて外に出るだけでよかつた。

「お兄ちゃん、薬ちゃんともひらつてる?..」

「うふ。かばんに入つてるよ」

一応薬はもひつた。

安定剤といつものだつた。

最後に医者に言われたのは、

『君にひとつ一一番いいのは

休むことだよ。

薬なんかよりもずっとね』

そつ言つて、医者はまた笑つた。

僕は医者や看護婦に頭を下げ

病院を出た。

「あー、ドタバタしたねつ!..

お兄ちゃん過労だなんてね、
やつぱりひよつと休むべきね

「わるかつたよ。迷惑かけた」

「わらう思つなら、
お畠私たちにおりつてよ！」

ねつ 真奈美ちゃん何食べたい？」

僕は真奈美の存在をしつかり忘れていた。

真奈美は何を食べたいか百合に聞かれ困っていた。

僕は正直こいつを早く離れて帰りたかったので、

「つるやうりした。

「お礼するつて言つたもんね。

何でもいいんだよ？

真奈美ちゃんどうする？

「あつ 私なんでもいいので・・・

百合さんと満治さんで決めてくんださい

「えー そうだなあ・・・

じゃあ、スパゲッティがいいな！

どつかお店ある？

「そうですね・・・

たしか、あつちの通りに小さこですけど、あります

「ではそこへ行きますかー 行くよー お兄ちゃん

百合は自分の荷物とお土産を持ち歩き出した。

百合の隣で真奈美は笑って案内していた。

彼女たちは随分打ち解けているように見えた。

僕の名前も百合から聞いたのだろう。

僕はこの先に待っていることに懲れを感じていた。

きつと真奈美は『聞いて欲しいこと』を話していくだろう。

僕はそれにびっくりするだらう。

なんと答えるだらう。

それを考へていると一軒の店の前で止まつた。

『MELODY』という看板がかかっていた。

『スペゲツティ屋』と言つよう喫茶店といつ感じだつた。

百合を先頭に中に入ると、

センスのいい音楽がかかっており

今日初めてなに

なぜか前も来た事があるようだに感じられた。

店内は狭く結構古いのだが、掃除が行き届いており

清潔だった。

「いらっしゃいませ。3名様でよろしいですか？」

「はい」

「いらっしゃいませ

店員は僕らを窓際の席に案内した。

そして百合と真奈美はスペゲッティとオレンジジュースを

頼んだ。

僕は何か食べる気分ではなかつたので

コーヒーだけを頼んだ。

ここには僕ら以外に

若いカップルと、

ランチタイムなのか

仕事着を着た女性二人組みが

自分たちの時間を楽しんでいた。

「改めて、真奈美ちゃん昨日は本当にありがとうございました。
お医者様に話したら、褒めてたよ」

セツ田合が言つと

真奈美は少し赤くなつて

ありがとうございます

と言つた。

「セツだ！

お兄ちゃんさんのこの名前知らないでしょ？
血口紹介しようよ！」

今血口紹介したつて

数時間後には

別れて、さよならするのに

何の意味があるのか。

「私、倉本真奈美です。
中学一年です。
よろしくおねがいします」

「ふふ！

なんだか面接みたいね。

百合はお兄ひやんはー!?

百合は相変わらず

気分を上げようとしている。

「橘満治です。

昨日はどうもありがとう

僕はまた礼を言つた。

「はーい! 私は橘百合ー23歳でえす! 満治の妹です!」

百合は身振り手振りで

大げさに自己紹介をした。

真奈美はそれを見て笑っていた。

兄としての意見は

もう少し妹には大人になつて欲しい、だつた。

そんなことをしているうちに

注文したものが運ばれてきた。

スペゲツティはトマトのいい香りがした。

百合と真奈美はそれをおいしそうに

食べ始めた。

僕はコーヒーをひとくちすすつた。

こぐがあり、香りもとてもよかつた。

豆から挽いているんだろうなと思つた。

僕の前に座つている真奈美は

黙々とスパゲッティを口に運んでいた。

だけど彼女の目は、話したいことを

切り出すきっかけを探していた。

僕はきつかけを『えないうちに

』を去ろうと決心していた。

「あーおいしかった！

『』のスパゲッティおいしいね。

お兄ちゃんも食べればよかつたのに
朝から何も食べてないでしょ？

百合の皿を見るともう全部平らげていた。

真奈美はまだ半分残つていてるところのこ・・・

「食欲が無いんだ。今はいい」

「ふーん・・・あのね、お兄ちゃん、
私病院に忘れ物したみたいなの。
ごめんななんだけど

取つてくるからここで待つて?」

「は?何忘れたんだよ?」

「ケータイ。多分あの仮眠室に忘れたんだと思うの」

「あとで行けばいいだろ」

僕はあせつた。

この子と一緒にれば

確実に僕は

話を聞くことになる。

それだけは絶対嫌だった。

「今じゃないとダメなのよ。
すぐ戻つてくるからー。」

やつらつて丘合はすばやく席を立ち

店から出て行った。

僕は情けないことにして、

自分の手が震えているのに気がついた。

僕は手をひざの上に置き

真奈美に震えているのを見えないようにした。

真奈美もやっと食べ終わったようすで、

フォークとスプーンを皿に置き

ふきんで口元を拭いていた。

僕らは互いに口を閉ぢし

相手の出方を探っていた。

気まずい沈黙が流れた。

「あの・・・」

口を切ったのは真奈美だった。

「何から話せばいいのかわからないんですけど
満治さんは・・・あの・・・
横井さんの息子さんですよね？」

僕は口を閉じて何も答えなかつた。

平静を装つたが、心臓は飛び跳ねていた。

「・・・すみません

百合さんから聞きました。

百合さんは、

自分は横井さんの娘だと教えてくださいました

そうか・・・

多分全部仕組まれていたんだ。

今日僕と真奈美が

いつじて話しているのも

百合が考え出したんだろう。

「いつもやつて話す場を作ったのか? 一人で」

「すみません、

そうでもしないと聞いてもらえないと思つたんです

何をやつているんだ僕は・・・

中学生のこの子に・・・。

「私は横井さんを知っています。
すゞくお世話になりました。」

僕の知らない父さんと母さんが

現れようとしていた。

「それで……
僕らのことを教えてもらひたのか？」

「いえ……直に話してもらひてはいません。
だけど、本当に時々ポツリと話すことがあったんですね。
私、そういう時は黙つて聞いていました。
悲しそうに……話していましたから」

真奈美はその光景を思い浮かべたのか

少し涙ぐんでいた。

僕は頭が真っ白になりそうなのを

何とかこらえていた。

父さんと母さんの20年間の一部を

真奈美は知ってる。

「なんで……僕らが横井さんの子だもだと思つたんだ？」

僕はずつと感じていた

疑問の1つを聞いてみた。

「似てるんです、満治さん。

横井高道さん「すゞく似てます」

横井高道は僕の父親だった。

「……似てる？ それだけ？」

「すみません、ほんと勘なんです。
だから最初声をかけるのもすぐ迷ったんです。
間違ついたら失礼だし……
けど、満治さんをよく見たら絶対この人だつて……
確信しました」

だから彼女はずつと僕を見ていたんだ

その理由はわかつた

しかし彼女もなんというか

無鉄砲だ。

ただの勘だなんて……

「百合になんて聞いたんだ？」

「はつきりとたずねました。

横井さんの娘さんですか……って

「なんて答えたんだ？」

「最初は否定されました。

けれど私の思つてゐることをお話したり
教えてくださいました」

真奈美は僕の質問に

はきはきと答えた。

最初の顔をうつむかせていた

彼女が嘘のようだった。

今はまた背筋を伸ばし

僕を見据えている。

「それで・・・何で僕と話がしたいの?」

「百合さんが・・・自分ではなく
お兄さんにしてくれ・・・と」

百合は僕に押し付けたのか?

どうしたことだ?

百合は僕に押し付けたのか?

「私はお一人にお話したかったのですが・・・

「百合は・・・どうして・・・

僕は独り言のよひにしつぶやいた。

「満治さん、

私の話聞いていただけませんか？
どうしても聞いていただきたいんです

僕は頭の中が空っぽになつた。

こつなつたらもう何も考えられない。

真奈美のことばも

もう入つてこない。

「満治さん？」

頭がいたい

ここから早く離れたい。

真奈美が僕の名前を呼んでいる

でももう答えたくなかった。

僕は彼女の話を聞きたくない。

「お兄ちゃん！」

これは百合の声だった。

心配そうに僕を見つめていた。

「どうしたの？大丈夫？」

僕はほつとして、涙が出そうになつた。

「真奈美ちゃん」めんね、
今日は帰らせてもらつていい？」

真奈美は頬を赤くして、百合の言葉に頷いた。

「お兄ちゃん歩ける？」

僕は椅子から立ち上がり

机の上にお金を置いた。

真奈美は肩を震わせ

足元を見ていた。

その姿を見ても僕は何も言わずに店を出た。

そして駅に向かおつとした。

「何時的新幹線があるのかな・・・
まあタクシー捕まえて、とりあえず
駅まで行こう」

僕は少し声のトーンを上げて言った。

なぜなら今度は百合が下を向いてしゃべらなかったからだ。

僕のほうに向しゃべりたくなかつた。

頭はがんがんするし

百合が真奈美に言つた言葉の意味も気になつてゐた。

「百合…どうした？ 行くぞ」

僕は百合に近寄り聞いてみた。

すると

「どうして…？
どうしてお兄ちゃんはそうなの…？
何で、過去を怖がるの…？
何で…・・・一人で背負い込むの…・・・
何で…・・・私に何も教えてくれないの…・・・」

百合は泣きはじめた。

僕は気が動転した

百合が泣いているわけがわからない。

僕はその場に突つ立つて何も出来なかつた。

「百合…」

「・・・私、帰らない。あの子の話を聞くわー！
お兄ちゃんが聞かないなら・・・私が聞くー！」

百合は僕をにらんだ。

いつたい百合が今どんな思いで話しているのか、わからなかつた。

真奈美の話がどれだけ大切なんだ？

どれくらい価値があるんだ？

百合は僕に何を求めているんだ？

「いいの？お兄ちゃん・・・
私真奈美ちゃんの話聞くよ？」

「百合・・・

いつたいどういうことだよ？

真奈美の何がそんなに大切なんだ？」

「話し何も聞かなかつたの？

お父さんとお母さんの話し・・・」

「少しだけ聞いた。

なあ・・・真奈美つて子は赤の他人だぞ。
少し父さん母さんを知つているからつて・・・」

この言葉に百合は反応した。

「赤の他人！？」

赤の他人は私だわ！！

お父さんお母さんの顔も知らない！

抱っこされた記憶も、あの人たちが笑ってる顔の記憶も
私は何一つもっていない！

こんな私こそ・・・

赤の他人じゃない！！」

僕は愕然とした。

今まで百合を思つて何も言わずに大切にしてきた。

それが彼女を独りにさせていたんだ。

真奈美が僕に話しおさせようとしたのも

百合は僕から聞きたかったからだ。

それを僕一人に押し付けたとか勘違いをして・・・

最低だ僕は・・・。

「百合・・・ごめん」

百合は何も答えなかつた。

ずっとハンカチで涙を拭いていた。

時々嗚咽を漏らしながら・・・

どれくらい時間が経つただろうか、

もう何十年も立っている気がした。

「お兄ちゃん・・・」

百合が真っ赤な顔をして

口を震わせながら

僕を呼んだ。

「私ホテル取ったの、
さつきケータイ取りに帰ったときこ。
私ここに残る。お兄ちゃんは?」

「僕は・・・」

もう逃げられなかつた。

ここに残つたら、

過去に向き合わないといけない。

橋家に帰つたら・・・

僕は本当の家族を失う。

「僕は・・・」

その時

甘いにおいが風に乗ってきて

僕の鼻をくすぐった。

どこかに金木犀の木があるのだろう。

甘い甘いでも甘いにおいだった。

百合は僕を見つめ、僕の答えを待っていた。

「僕は・・・

話すよ、あの子と」

百合はほつとした安堵の笑みを浮かべ

「お兄ちゃんの・・・

部屋も取つとこよかつた

と言つた。

「百合・・・

本当にじめん」

これには百合は答えず、自分の荷物を持ち歩き出した。

僕もそれ以上は言わなかつた。

百合は多分自分の言葉に

後悔しているから。

僕は過去を求めに行く。

それは一十年間逃げ続けてきたものだ。

けどきっともう逃げられない。

僕と百合には父ちゃんと母ちゃんの一十年間を知る

義務があると思うから。

僕は前を見た

そこにはオレンジ色の金木犀が

風に揺られて踊っていた。

第一章～第一章（後書き）

「」まで読んでくださつありがとうござります。

満治がやつと重い腰を上げてくれたので、真奈美のことは両親のことをかけます。

まだまだ書きたいことはたくさんあるので、このお話を大切に完成させていきたいと思います。
よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3127d/>

銀木犀

2010年11月16日08時31分発行